

無人運航船プロジェクト・MEGURI 2040 ①

国土交通省と海員組合が合同で乗船視察

自動運航実証実験船「げんぶ」に乗船／東京港～仙台港

2020 年 2 月から日本財団が推進している無人運航船プロジェクト「MEGURI 2040」は、第 2 ステージに移行し、7 月 10 日に 4 隻の実証実験船の一つ、内航コンテナ船「げんぶ」に国土交通省海事局と海員組合が合同で乗船視察し、東京港から仙台港までの実証実験を視察・検証した。乗船視察団は国土交通省海事局から 4 人、本組合からは田中伸一組合長代行と漢那太作総合政策部長、佐藤哲也国内部執行部員の 3 人の合計 7 人。乗船視察中は人間が操船に介入することなく本船が自動で航行する「自律航行」によって、船舶輻輳海域である東京湾内の航行を視察したほか、本船側でトラブルが発生した時に、そのトラブルを陸上支援センターが認識し対処できるのか、テストが行われた。

自動運航実証実験船「げんぶ」は、2026 年 1 月に竣工した新造船で、全長 134 メートル、総トン数 5689 トン、696TEU 積み（700TEU 型）の最新鋭内航コンテナ船。

東京港から「げんぶ」に乗船し、日本郵船株式会社の船長経験者でこのプロジェクトのディレクターを務める桑原悟さんが、視察団に本船の自動運航に関する設備と船内居住区を説明した。桑原さんは株式会社日本海洋科学の執行役員・先進技術グループ長の肩書を持つ。

居住区は各居室にシャワーとトイレが設置されているほか「げんぶカフェ」と名付けられたカフェテリア兼娯楽室、インドアゴルフ練習ができる部屋など、船内環境の充実も図っている。

「げんぶ」の船舶管理と配乗を行っている株式会社イコーズの畝河内毅代表取締役社長から、船内設備の説明があり「全乗組員の居室で、航行中の船位や荷役の進捗がわかるようモニターを設置し、各種情報をデジタルサイネージとして表示することで、居室から出ることなく次の当直に備え休息することができる。自身が船員として乗船中に経験したことと、乗組員たちの声も取り入れ、一緒に造り上げた船で、自動運航船の実証実験が、将来、船員を支える大きな一歩になると期待し協力している」と思いを語った。

「海員だより」